

書き込み機能を使いこなす

今回は、指導者用デジタル教科書の機能の中でも、もっとも活用する頻度が高いと思われる、書き込み機能についてじっくりと考えてみたいと思います。

1 頭と身体を使って読む

皆さんは、本を読むときに、線を引いたり、コメントを書いたりすることはありますか？もしかすると、「本を汚すなんてもつての外！」という人のほうが多いかもしれません。

私は、断然「書き込みをする」派です。本を読むときには、書き込み用のボールペンや、付箋がないと落ち着きません。それがないときは、ページの角をちよこつと折ってその場をしのぐほどです。しかし、初めからそうだったわけではありません。きっかけは、大学の恩師である齋藤孝先生(※)との出会いです。とにかく本によく書き込みをする先生で、黒・赤・青・緑の四色ボールペンをいつもそばに置き、じゃんじゃんに書き込

2 国語科の学習における書き込み

あらためて考えてみると、私は自身の読書だけでなく、国語科の授業でも、生徒によく書き込みをさせているなあということに気づきました。

ちなみにここでの「書き込み」とは、「読み手が本文に何らかの情報を付け足すこと」という意味です。例えば、傍線を引いたりマーカーで色を付けたりすること、丸で囲んだり線で結んだりといった目印を付けること、マークやコメントなどの情報を書き込むこと、付箋を挟むことなど、全てをひっくるめて「書き込み」とします。

思いつくままに、国語の授業で何を書き込んでいるかを左ページに書き出してみます。

●「星の花が降るころに」の学習で

図1は、「星の花が降るころに」(二年)で生徒が書き込みをしたプリントです。冒頭と結末を並べて比較し、表現から読み取れることをどんどん書き込んでいきます。そうすることで、作者が、銀木犀などの何気ない描写の中に、主人公と夏美との関係の変容を、とても意図的に忍び込ませているということがわかってきます。

国語の学習での書き込み

- ①表現の工夫を指摘するために
 - ・表現技法(擬人法・反復などの修辞法)が使われているところを探す。
 - ・象徴的な表現、暗示をしている箇所などを指摘する。
- ②自分の読みを確認するために
 - ・最も大事だと思つたところを探す。
 - ・お気に入りの表現、最も共感できるところなどを指摘する。
 - ・登場人物の心情がよく読み取れる箇所を見つける。
 - ・人物設定や、置かれている立場状況などがわかる表現を探す。
- ③文章の構造を浮き立たせるために
 - ・序論・本論・結論などの段落分け、文学作品の場面分けをする。
 - ・対比や類比、言い換え表現などを明示する。
 - ・キーワード、主張と根拠、具体例のつながりなどを示す。
 - ・「はじめに」「次に」などの順序を示すセツトの言葉に注目する。
 - ・接続詞をチェックし、論理関係を確認する。
 - ・文末表現をチェックし、書き手の主張をつかむ。
- ④感想・意見を書き出すために
 - ・読み進めながら感じた自分の「つ

ぶやき」を書き留める。

- ・「つっこみ」を入れたり疑問をもったりしながら批判的に読む。
- ・賛成・反対や共感・反感など、読者として感じたことを書き込む。
- ⑤関連する情報を書き足すために
 - ・漢字の読み、言葉の意味などの情報を書き足す。
 - ・調べてわかったことなどを書いて付け加える。

こうして見ると、「書き込み」とひと言でいっても、いろいろな読みの学習要素が埋め込まれていることがわかります。例えば「少年の日の思い出」(二年)の授業では、「僕」がエーミールを呼ぶときの呼び名を全て探し、丸で囲みましよう」と指示をして、書き込みをする学習活動を行うなどしています。

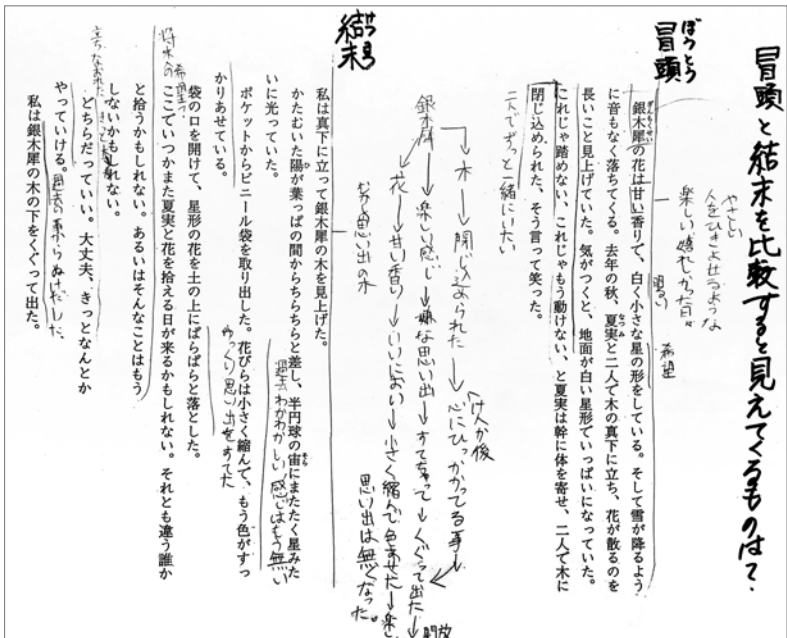


図1 「星の花が降るころに」で使用したプリント

※ 明治大学文学部教授。専門は教育学、身体論、コミュニケーション論。3色ボールペンを活用した読書を実践。

